

スミベタ (洗用)
on
スミベタ



道宗 明

DDSHU-KAJIURA, Akira

日本大学医学部
麻酔科学系麻酔科学分野青森県出身
弘前大学・2005年卒業

<所有資格> 1/a 09:DB 16H

厚生労働省麻酔科標榜医 / 日本麻酔科学会専門
医、指導医 / 心臓血管麻酔専門医 / 日本老年麻酔
科学会専門医 / 博士号 (自治医科大学)

1/a 09:M 16H 22w 話

1/a 09:DB 17H (以下同)

■これからの目標、展望(働きかた/生き方)

大学に在る以上、何かしら研究・教育にかかわるべきなのは理解しているのですが、なかなかどうして難しいです。朝、子供を送り、遅れて出勤(BOSSからOKを頂いてはいますが申し訳ないです)、帰宅後は子供の練習に付き合ひ、塾や学校の宿題の面倒を見て(算数難しい?）、風呂を沸かし、布団を敷いて寝かしつけ、食器を片付け、洗濯をし、風呂を洗って等々をしていると気が付けば日付が変わっています。世の中のママさんたちはすごいと思います。学会発表ネタは論文に昇華できず溜まっていき、研究ネタはあるけれども計画書まで手が回らず。平均睡眠時間は3時間? 一体私はどうすれば? 子育て奮闘中の同志の皆さん、アドバイスください。

■自分の趣味や休日の楽しみなど

前述の取材以降、子供がバイオリンを続けており、コンクール出場の際にピアノ伴奏をしています。ピアノが大好きな自分はバイオリンの曲は無知に等しく、先生から新しい曲が与えられる度に「こんな素敵な曲があったのか」と感心する一方、本番まで2、3か月しか猶予がない中で新曲を仕上げるのがかなりきついです。家に帰っても練習時間がありませんし、いつも本番で間違えています(娘よ、すまぬ)。周りはプロの伴奏者ばかりなので、いつも肩身が狭いです。だんだんと曲の難易度が上がってきているので、そろそろクビを宣告されるのを覚悟しています。

酔科専門医を取得して、さてこれからどうしよう。
サブスペシャリティ? 研究? 麻酔は楽しいし、どれもやってみたい。
結婚や出産はどうしよう?
先輩たちは、どうしてきただろう…?

みんなのプロフィール帳

◆ 医師を志した動機 ◆

兄の影響で真船一雄先生の漫画「スーパードクターK」を愛読していて、なんとなく医学への興味はあった。中学1年から高校卒業まで公費医療のお世話になり、小児科へ通院するうちに主治医の先生に憧れて志すようになる(橋本先生、小児科医にならずすみません)。

医学部からこれまでの歩み

1・2年目: 十和田市立中央病院 初期臨床研修

学生時代はなんとなく産科に興味があり、施設見学先の婦人科の先生に熱烈勧誘を受け研修先を決める。が、入職すると同時に某大学産婦人科が人員を引き上げ、件の先生もいなくなり産科研修不可になる。悶々とした気分のなか、8か月ほど自由選択で麻酔科を選択する。「ガンマ計算で面倒くさいのう……」と思ひ、麻酔科を志望するには至らないものの、麻酔科としての土台が培われた。

3年目: 自治医科大学附属さいたま医療センター 後期臨床研修

後期研修先に悩んでいた矢先、例の婦人科の先生に誘いを受け、誘われるがまま自治医科大学附属さいたま医療センターに就職する(この時は婦人科)。当時の部長に「一年待てば産科ができる」と言われていたが一向に開設される雰囲気はなく途方に暮れる。外勤も許されず、タコが自分の足を食べて飢えを凌ぐかのように貯金を切り崩す生活となる。当時は外科系研修医が必ず麻酔科・ICUをローテーションする決まりがあり、ここで初めて心臓血管外科や呼吸器外科の症例に触れ、「あれ、麻酔科って面白いじゃないか」と気づき、翌年から麻酔科になる。

5年目: 自治医科大学附属さいたま医療センター 麻酔科

赴任してきた指導医が研究を開始することになり、共同研究者を募っていた。この頃の自分は研究に興味なし。「誰か一緒に研究してくれる人〜?」シーンとする医局会で偶然目が合ってしまったために、筋弛緩に関する臨床研究と一緒に始めることとなる。言われるがままデータを集め、学会で発表し、論文にして掲載され、企業のawardまで頂戴する。ちょっとと研究を頑張ってみよう、と思ひ始めたこの頃。

7年目: 結婚。日本麻酔科学会専門医 取得

自転車通勤中に逆走自転車に突進され、急ブレーキで回避したものの、前転して頭から落車し顔面骨折。これをきっかけにイケメン度が向上する。専門医試験合格のご褒美に、グランドピアノを購入。

8, 9年目: 横須賀市立うなまち病院 (現、横須賀市立総合医療センター) 麻酔科 出向、心臓血管麻酔専門医 取得、長女誕生

三浦半島の山を自転車と越えて通勤する毎日。体型がシュツとする。

12年目: 何者かに、研究用の検体を保存していた冷凍庫の電源を抜かれ、すべての検体が腐る。自分もくさる。研究の世知辛さを痛感したこの頃。体型も元通り。

14年目: 国立国際医療研究センター病院 麻酔科、博士号 取得

満員電車通勤に心折られ(田舎者あるある)、その後イムス富士見総合病院に転職。この時のBOSSに、どんな些細な事でも論文発表に昇華させる術、観察力、洞察力などを学ぶ(が、しっかり身に付いたかどうかは?)。長女が日本テレビ「ZIP!!」の街頭インタビューを受ける。「クリスマスプレゼントにバイオリンが欲しい」と答えたものだから、面白がられて家まで取材がくる。山口メンバーが同会だったこの頃。

16年目: 日本大学医学部 麻酔科学系麻酔科学分野

子供を学校に送って、それから出勤して……というのが時間的に不可能になり、困っていたところ現施設から誘いを受け今に至る。コロナが流行し、歓迎会がされなかったこの頃。

20年目: 日本大学病院 麻酔科

科長として赴任する。偉い人達の苦勞を身に染みて体感した2年間。

22年目: 再び現施設へ復帰し現在に至る。